本棚の古典の散歩道

『クマのプーさん』岩波少年文庫 008
A.A. ミルン作　石井桃子訳
（岩波書店　2000 年）

ウィニコットと「クマのプーさん」

評者　井原成男
（大学教員）

ウィニコットとフロイト

イギリスの児童精神分析家であるウィニコットは、フロイトの創始した精神分析に、①「生き残ること」という、育児にとても示唆を与えるコンセプトと共に、②「中間領域」というアートの示唆的なコンセプトを付け加えました。①は親が自分自身を破壊せず、他者としての子どもをも破壊しないで生き残ること、②は、子どもが心の中の世界から、外の客観的な世界へと超越し、やがて内的にも外的にも確固とした世界をつくっていくために、内と外をつなぐ役割を果たす領域として、やがてアートや哲学などに進化していく領域のことです。

クマのプーさんとアート

このアートの一つとして「クマのプーさん」を取り上げます。

井原成男（いはらなりお）
お茶の水女子大学教授。

クマのプーさんについて見ていく時、私たちは、プーさんの物語のみでなく、登場人物であるクリストファー・ロビンと、作者でありロビンの父であったミルンのことも考えていくべきでしょう。クマのプーさんの原型であるテディ・ベアというのは、どんなクマなのでしょうか？

ミルンの児童詩集である『ぼくらが小さかった頃（*When We Were Very Young*）』にテディ・ベアが出てきます。ベッドから落っこちたテディ・ベアと、男の子のベッドに寝ているテディ・ベアが描いてあります。「テディ・ベア（Teddy Bear）」という題がついています。この詩集が出たのは一九二四年で、『クマのプーさん』の出る二年前です。この頃はまだクマのプーさんにはなっていない、ただのテディ・ベアです。ただのぬいぐるみであるテディ・ベアが、どんな過程を経て「プー」になっていくのでしょうか。

この同じミルンの詩集の中に、「階段の途中で（Halfway Down）」という詩が出ています。階段の途中に座っているロビンの後ろにいるクマは、まだ、ただのぬいぐるみですが、もう半分うす目を開けていて、きっと将来は「プー」になっていくのではないかと期待を抱かせます。

この詩集の後、第二詩集として、ミルンは一九二七年に『そして、ぼくらは六歳になった（*Now We Are Six*）』という詩集を出します。ここでは、テディ・ベアは消え、プーが登場しています。

「ぼくたち二人（Us Two）」という詩の中では、もう二人は大の仲良し、生きた二人として付き合っています。挿絵の下に書いてある詩句を見ると、プーという名前が出てきます。「ボクがいるところには、いつもプーがいる」と書いてあります。親友になっているのです。

ただのぬいぐるみのクマであったのが、ここでは、自分で階段を上ってロビンの後をついていく、生きたクマになっています。

二人のロビン

ミルンの息子のクリストファー・ロビン、つまり実生活のロビンはどんな子どもだったのでしょうか？　ミルンは、自分の息子がテディ・ベアと遊んでいる様子を見て、クマのプーさんの物語を空想していきました。

ロビンを育てたのは〝ナニー〟といって、乳母と看護婦の役目をして、子どもを母親に代わって育てる人です。この頃のイギリスの上流階級の人は、自分で子どもを育てない。成功した作家の息子であるロビンもそうでした。彼は、このナニーにとてもなついていて、夏、海水浴に出掛ける時も、ナニーが行かないのなら行きたくないと言っています。彼自身、のちに自伝の中で「私は、どこまでもナニーの子で、九歳までそうだった」と書いています。

ナニーは、彼が九歳の時、結婚してミルン家を去ります。この年、彼は寄宿舎に入るのです。ロビン自身、「ナニーは母のように大事で何でもしてくれる人であった、そしてクマのぬいぐるみは、そのナニーの代わりだった」と言っています。決して母親の代わりでなかったというところがロビンの二重に悲しいところだと思います。

中間領域としての「百エーカーの森」

ところで、クマのプーさんの物語世界（中間領域）の中で展開されるテーマはどんなものなのでしょうか？

この世界（「百エーカーの森」）では、みんなとても親切です（この森は現在でも当時のままに残され、保存されています）。とても根暗のロバのイーヨーでさえ、ちゃんとプレ

ゼントをもらえる。誰も切り捨てられない、そんな母性的で、守られた、しかも自由で融通無碍（むげ）な世界です。プーさんの中で私が最も好きなのは、はねっかえりのトラーですが、この虎はいつもハネっかえっている、いたずらものです。ところが、このトラーは最初から元気だったわけではない。このトラーにはお母さんがいないのです。このトラーが何を食べるのか？　プーたちは一生懸命探してあげます。

ハチミツもドングリもアザミもだめ。結局、トラーが食べられるのは、カンガのとこの赤ん坊のルーが食べる、麦芽エキスという離乳食だったのです。フロイトのいう口唇期を思い出してください。トラーは大きそうに見えたけれど、実はまだ赤ちゃんだったというところが、とても面白い。心理療法では心の傷ついた子どもをいやすために、いったん、その子の赤ちゃん返りを許容します。そうすることによって、その子はまた力を得ることができるのです。

分離不安と生き残ること

やがてロビンは九歳になり、寄宿舎に入り、子ども時代に別れを告げるために、プーとお別れします。二人が別れ、そして百年たってもここに来たらいつでも会えるという固い約束をした場所は「ギャレオン凹地」といいます。この場所からの別れは感動的に次のように書かれています。

「『プー、ぼくのこと忘れないって約束しておくれ、ぼくが百歳になっても！』（中略）そこで二人はでかけました。ふたりのいったさきがどこであろうと、またその途中にどんなことがおころうと、あの森の魔法の場所には、ひとりの少年とその子のクマがいっしょにあそんでいることでしょう。」

この「ギャレオン凹地」というのは一体どこなのでしょうか？

それはその後のプーの運命によって明らかです。プーはアメリカ旅行に出掛けます。クマのプーさんの物語があまりにも有名になり、このぬいぐるみを一目見たいというアメリカの少年少女の熱望に応えたのです。この際ミルンが出した条件は、ぬいぐるみのプーがいくら汚れても決して洗わない、というものでした。プーは今でもアメリカのダットン社の陳列棚の中に陳列されています。プーのぬいぐるみに会いたくないか、というインタビューに答えて、今や大人になったロビンは、こう言いました。

「平気です。愛情はいつも自分の心の中にあります」と。

私たちは、ある対象との愛情をイメージとして内面化できてはじめて、ぬいぐるみの世界から旅立っていけるのだと思うのです。この内面化された場所がまさに「ギャレオン凹地」なのです。

中間領域と生き残ること

このように見てきますと、クマのプーさんは、ロビンという少年が、実際のテディ・ベアを使って、プーという物語（＝イメージ世界）の中で、プーとの二人の世界をつくりあげてそこから抜け出していく。まさにこれは、ぬいぐるみとその運命を、子どもの内面からとらえた物語なのです。

そして、この場所こそが、ウィニコットのいう②の「中間領域」であり、この領域は、それが本当にリアルなことなのか、フィクションであり、作り事のファンタジーなのかを問われない、中間領域であり、ギャレオン凹地というこの場所に守られて、ロビンは大切なナニーと別れ（それはプーとの別れという形を取っていますが）、その一大事から①生

き残り、やがて来る寄宿舎の生活を迎え、そして大人になるという、どの子どもであれ、いや応なく適応していかなければならない③分離、そして分離不安という一大事を越えていくのです。

おわりに

ウィニコットは、その学問的基礎と訓練をフロイト、正確にいうと、フロイトの心理的現実という考え方をさらに精神内界主義としてラディカルに推し進めたクラインから受けましたが、やがてそこから離れ、「生き残ること」や「中間領域」というコンセプトによって、外的世界という、子どもにとっては母親（あるいは母親代理としての養育者）との関係性を明示化し、それを治療論や育児論にまで推し進めました。

そのことによって、自分自身を知れば自然に、環境や世間の側が手を差し伸べるという素朴な治療観では立ち行かなくなっている、現代の状況下で求められる、真の治療的コンセプトを、期せずして構築したのです。

参考文献

1　井原成男『ウィニコットと移行対象の発達心理学』福村出版　二〇〇九年

2　Milne, Alan Alexander, (1924) *When We Were Very Young*, (1926) *Winnie-the-Pooh*, (1927) *Now We Are Six*, (1928) *The House At Pooh Corner*
（日本語訳には、本稿冒頭表紙絵の岩波少年文庫シリーズのほか、
A. A. ミルン作／E. H. シェパード絵
『クマのプーさん全集 ―おはなしと詩―』
（石井桃子・小田島雄志・小田島若子訳）
岩波書店　一九九七年　などがあります。）